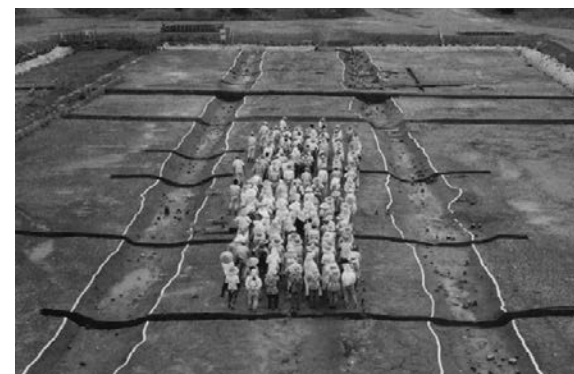


歴史伝える東海道の遺跡

古代の道路はどんなものだったのでしょうか。その答えは1994(平成6)年に静岡市で見つかった「曲金北遺跡」にありました。

駿河区にあるグランシップの建設の際に行った調査で見つかったこの遺跡は、道幅約10mで直線に延び、同時に見つかった木簡などから8〜10世紀の古い東海道だということが分かりました。

都である奈良・京都から関東まで、この大きな道路がずっと敷かれていました。それまで古代の道は、自然にできたもので道幅も狭かったところが発掘調査によって、この時代には既に立派な道路が造られていたことが分かったのです。



曲金北遺跡の発掘現場写真。作業員さんの様子から、道路の幅を想像できます。静岡県埋蔵文化財センター提供



「日本古代道路事典」八木書店2004をもとに作成

都周辺の五つの国と、大きな道路に沿った七つの地域のことを「五畿七道」と呼びます。東海道はその中の一つで、道路でもあり、地域でもありました。

また、古代の道路は、場所によって国や郡の境とされたり、周辺の土地を一定の大きさに区画する際の基準とされたりするなど、道路は政治的にも重要な役割を果たしていました。これだけの規模の道路を人の手で造り上げ、全国に張り巡らせるというのは、大変なことだったでしょう。しかし、この道路があったからこそ、都の指示を地方に伝え、さまざまな物資や、人の移動をスムーズに行うことで、政府は国を治めることができました。こうして私たちの住む静岡(駿河の国)は一本の道で都となることができたのです。

監修：近江俊秀・文化庁文化財第二課主任文化財調査官、中村羊一郎・静岡産業大総合研究所客員研究員、本郷和人・東京大史料編纂所教授